

護良親王と後醍醐天皇の確執

はじめに

一三三五年（建武二年）、鎌倉にて後醍醐天皇の皇子である大塔宮護良親王が、測辺伊賀守義博の手にかかり二十九歳の若さで殺害されたという。後醍醐天皇の皇子であり、武勇に秀で、元弘の乱にて僧兵を率いて活躍、鎌倉幕府倒幕や後醍醐天皇の新政に尽力し、建武の中興で征夷大將軍・兵部卿に任ぜられるなど、多大なる功績を残した護良親王はなぜ殺害されたのか。護良親王と同じ時代を生きた様々な人物との関係性や、南北朝時代という時代背景も含め、護良親王が殺害されるに至った理由を本稿で追求していきたい。また今回は様々な人物の中から護良親王の父である後醍醐天皇との確執について特に取り上げることにする。

また、小論では森茂暁氏の『南朝全史 大覚寺統から後南朝へ』（講談社 二〇〇五年六月刊）と亀田俊和氏の『シリーズ【実像に迫る】〇〇七 征夷大將軍・護良親王』（戎光祥出版 二〇一七年四月刊）、その中でも直近の刊行である新井孝重氏の『護良親王——武家よりも君の恨めしく渡らせ給ふ——』（ミネルヴァ書房 平成二九年九月刊）を参考にして研究を進めたい。

一、南北朝時代

はじめに、護良親王が生きた南北朝時代とはどのような時代であったかについて知る必要がある。森茂暁氏の『南朝全史 大覚寺統から後南朝へ』を参考に南北朝時代とはどのような時代であったか整理しておく。

土居 准子

（山崎 美紗子ゼミ）

南北朝時代とは、一四世紀に天皇家が南朝と北朝に分裂したことにより展開した大規模な動乱の時代のことであり、分裂した二つの天皇家のうち京都の朝廷を北朝、吉野など近畿南部の各地を転々としたもう一方の朝廷を南朝と称している。南北朝の動乱が展開した日本の中世は分裂と抗争の時代と言えるだろう。階層、場所を問わず様々な分裂と抗争が生起し、時代が動いていった。分裂と抗争は天皇家にも波及し、鎌倉時代の中ごろに天皇家は大きく二つの系統に分かれる契機に遭遇した。この二つの系統の初代は兄弟の関係にあり、兄の系統を持明院統、弟の系統を大覚寺統と称している。

ここからは持明院統と大覚寺統、それぞれについて論述する。

持明院統と大覚寺統

まず持明院統とは後深草―伏見天皇の皇統で、その名称は伏見上皇以降この皇統が持明院殿（現在の光明院の場所とされる）を里内裏・仙洞御所にしたことになむ。

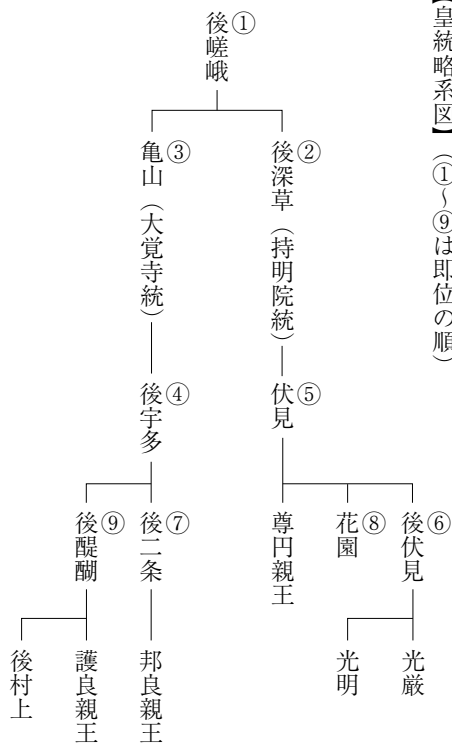
一方、大覚寺統とは亀山―後宇多天皇の皇統のことで、後宇多天皇が皇后遊義門院始子の早世（一二三〇七年七月）と嫡子後二条天皇の急逝（一二三〇八年八月）という不幸をうけて出家し、京都西郊の真言宗大覚寺に隠棲し、次子後醍醐天皇の踐祚（前天皇から神器を譲り受けて新しい天皇が立つ儀式）にもなって二度目の院政を担当したとき、この寺を施政の本拠にしたことになんでいる。

持明院統と大覚寺統は互いに天皇の座をめぐる対立したと説かれるのが常であるが、両統は、最初からのちに見えるような厳しい対立関係にあったのではなく、後嵯峨院死後に生じた皇位継承をめぐる争いに加え、

護良親王と後醍醐天皇の確執

皇室領荘園の領有をめぐる抗争から対立するようになり、鎌倉幕府の斡旋で両統から交互に皇位につく両統迭立を原則として、鎌倉時代後半を通じて両統の勢力均衡が保たれつつ対立がつついたが、持明院統と大覚寺統は、皇位を事実上決定していた鎌倉幕府に対して政権を担当する能力があることをアピールするため、競い合うように朝廷の訴訟制度改革をおこなった。これが、鎌倉後期の公武徳政政策に帰結し、両統迭立は政道を興隆させた有意義な側面もあるが、大局的には皇位継承を不安定化させ、政治を混乱させた側面が存在したことは否めず、世代を経るごとにそれぞれの系統も分裂を繰り返し、皇位継承競争を一層激化させた。

【皇統略系図】(①～⑨は即位の順)



二、大塔宮護良親王

大塔宮護良親王は延慶元年(一二〇八年)に後醍醐天皇の皇子として生まれ、のちに比叡山延暦寺にはいって尊雲法親王と呼ばれた。彼は比叡山の有力門跡である梶井門跡(現在の三千院)に住み門主となり、やがて第一一六世天台座主(天台宗の総本山である比叡山延暦寺のトップ)の地位に二十歳という若さで就く。護良親王が出家して最初に入室した

のは京都東山近くの白河天皇の御願寺である法勝寺辺である。法勝寺には九重の大塔がそびえ立っており、この大塔のほとりに梶井門跡の子房である「大塔」が存在した。護良親王は師匠である覚雲法親王師を通して覚雲が師と仰いでいた「大塔澄覚親王」の法流を受け、澄覚が住んだ法勝寺辺の梶井門跡子房「大塔」に入室した。これゆえに護良親王は大塔宮と呼ばれたのである。

護良親王が入室した子房「大塔」の祖師である澄覚法親王は皇族で、後鳥羽の孫であり雅成親王の子であった。雅成親王は承久の乱のあとに但馬国に配流された。護良が入室した時には澄覚はすでに薨去していたので直接の面識はなかったが、伝統ある子房の開祖ということで護良に与えた精神的影響は大きかったであろう。護良親王が入った当時の梶井門跡は、承久の乱における敗者の反幕府的な気風が強かったと考えられ、このような雰囲気の中で育った護良親王もまた、幕府に対する反感を強く抱いていたであろうと想像できる。

天台座主となっても、寺院の運営に尽瘁することなく、もっぱら倒幕戦争を考え武勇を磨いていたといい、そのありさまがあまりにも貴族や僧侶の像からかけ離れていたため、「未だ斯かる不思議の門主は御坐さず」とまで言われたという。

護良親王の逸話

護良親王には様々な逸話が残されているが、中でも奈良の般若寺(奈良市)に潜伏していた際、護良親王が仏壇の前の唐櫃に身を潜め、あえて蓋を開け放したままにして追手の搜索を逃れたという太平記に描かれる逸話が有名である。

……宮は透間もなく取りこめられさせ給ひて、御出であるべき方もなくて、すでに御腹を召されんと申し召して、推しはだぬがせ給ひたりけるが、ことの叶はざるにこそ腹をも切るべけれ、まず隠れてみばやと思し召して、御堂へ走り入らせ給ひたれば、人の読みかけたる大般若の箱三つあり。二つの箱には御経入れて蓋を開けず。一つの箱は御経半ば取り出だして、蓋開きたりければ、その中へ飛

び入らせ給ひて、御経を引き覆ひ、身を縮めてぞ御座しける。もし見付け進らす事あらば、やがて御腹召さんとて、氷の如くなる刀を抜いて、御腹にさし当て、扱し進らせんもの、「ここにこそ」と申さんずる一言を待たせ給ひける御心の中、推し量られて哀れなり。

案の如く、兵ども御堂にも乱れ入りて、仏壇の中、天井の上まで、残る処なく捜し奉る。されどもさがしかねて、大般若の箱をあけて、底を返してぞさがしける。元より蓋のあきたる箱をば見るまでもなくて、兵寺中を出でにけり。宮は不思議の御命を生きさせ給ひ、夢の様にて箱の中に御座しけるが、もしまた帰り来て、なほもさがす事やらんずらんと御思案あつて、先に兵のさがしつる箱の中へ入りかはりて御座しけるに、案の如く、ある兵立ち帰つて、先に蓋のあきたりつる箱を見ざりつるが、不審に覚ゆ」とて、御経を打ちうつして見けるに、からからと打ち笑つて、「大般若の箱の中をよくよくさがしたれば、大塔宮は御座さで、大唐の玄奘三蔵こそありけり」と戯れて、一同にとつとぞ笑つて、門より外へぞ出にける。〔『太平記』巻五「大塔宮南都御隠居後十津川御栖ひの事」より引用
以下『太平記』の引用は小学館の新編日本古典文学全集による〕

この逸話から、護良親王がただ武勇に優れただけの皇子でなく、知性も兼ね備えており、大胆な性格をしていたことがわかる。

三、後醍醐天皇

後醍醐天皇は第九十六代天皇（在位一三一八〜三九）であり、護良親王の父である。後醍醐は正応元年（一二八八）に生まれ、諱を尊治という。延慶元年（一三〇八年）、二十一歳で花園天皇の皇太子となつてから十年後に当時としては異例の壮年に達しようやく皇位をふんだという。元亨元年（一三二二年）二月に後宇多上皇の院政が廃止されると、^{（注1）}名実ともなる後醍醐天皇の親政が始まる。しかし、後醍醐天皇の即位は、本来は予定されていなかったことであり、大覚寺統では、後醍醐の兄で

ある後二条が嫡流とされ、後宇多は後二条の系統が皇位を継承することを希望していた。だが、後二条の皇子である邦良親王が幼少で病弱であったため、邦良が成人するまでの中継ぎの天皇として後醍醐が即位したのである。後醍醐天皇の登場は当初から予定されていたわけではなく、大覚寺統のお家事情から急遽とられた措置であつたことがうかがえる。

後醍醐政策で最も有名なものと言へば、「建武の新政」である。鎌倉幕府滅亡後、これまで政治の中心は武士であつたが、後醍醐天皇は、「親政」を開始した。後醍醐天皇は摂政や関白を置かず、記録所を復活させ、武者所、雑訴決断所などを設置し、天皇中心の政治を進めた。

また、後醍醐天皇の政策の特徴の一つとして、自らの皇子たちその目的のために手足のように利用した点があると、『南朝全史 大覚寺統から後南朝へ』の中で著者である森茂暁氏は述べている。後醍醐天皇の皇子たちは、多方面で縦横無尽に活躍したが、その最たる存在が護良親王である。護良親王は、幼くして、天台宗の梶井門跡入室し、天台座主の地位にまで上り詰めている。後醍醐天皇が、護良親王を比叡山に送り込んだ目的は、『太平記』では、「鎌倉幕府倒幕のため」であるとして、後醍醐天皇は自ら法勝寺・日吉社・山門・無動寺といった天台宗の主要寺院を歴訪し、総勢三千と言われる比叡山の僧兵たちを手なずけている。護良親王は僧兵の倒幕勢力への組織化に一役買ったといえる。護良親王を比叡山に送り込んだことは、鎌倉幕府倒幕への足掛かりとなつたと言える。

護良親王以外にも、宗良親王や義良親王、成良親王などのほか、多くの皇子たちが様々な場所に派遣されている。

こうした皇子たちの派遣、換言すれば王権・権威の分出という形をとるのが後醍醐天皇のやり方である。こうした手法は南北朝期に入つて南朝勢力が劣勢となつた段階で再び本格化する。皇子をさらに他の地域に派遣して、その地域に南朝勢力を扶植しようという目的である。少なくとも十七人も皇子がいた後醍醐天皇にとって、このような政策は鎌倉幕府倒幕において絶大な効果を上げた。^{（注2）}

四、護良親王と周囲の人間

『本朝皇胤紹運録』^(注3)によれば、後醍醐天皇は少なくとも二十人の女性との間に皇子十七人、皇女十五人の計三十二人の子どもを儲けたという、出生の順は諸書によって違うが、記録を突き合わせて年齢の順を見ると尊良・世良という二人の異母兄が存在し、だいたい三番目の皇子であったとする見解が有力であるが、護良が第一皇子であったとする説も存在する。護良を第一皇子とする説からは、後醍醐天皇は一宮が大きくなるにつれて、この子の利発さに気づき、この子に皇位を継がせようと考えた。この時の護良は、長じて父帝さえ乗り越えかねない賢さと気力をそなえもつ存在ではなかったため、親からすればかわいくもある利発さであったという。そのため、率直に皇位を継がせようと考えたのだろう。

だが、そもそも後醍醐天皇は大覚寺統の正嫡である邦良親王が成長するまでの代役として即位したのであり、さらに、邦良即位のあとは持明院統から皇太子が立つことが決まっていたため、いかにおれの子が聡明であっても後継者にすることはできなかったという。

また、『鎌倉將軍家譜』によると後醍醐以後の皇位継承について興味深いことを述べており、京都朝廷は文保二年（一三二八年）に関東に勅使を派遣し、護良を東宮になさんとしたが、北条高時はこれを聴さず、後二条の子である邦良を太子にすえたために、後醍醐はこれを恨んだという。邦良は病弱だったという焦りもあり、関東には後醍醐の退位を早めようと働きかけ、邦良を引き立てようとする者もあり、それに対し、後醍醐は幕府に激しい憤怒を懐いたという。

これらのことから護良親王と後醍醐天皇は最初から確執があったわけではないことがうかがえる。むしろ、護良の利発さや気力を買い、東宮へと考えていたほどである。後醍醐天皇からすれば、武勇に秀で、賢く利発な息子というのはいくつかあったのであろう。だが、東宮にと考えていたほどのこの護良親王の武勇と利発さが、のちに、後醍醐天皇との間に確執を生む一因となってしまうのである。

その他の人物

阿野廉子

後醍醐天皇の妃で、阿野公廉の娘、洞院公賢の養女である。天皇の寵愛をうけ、後村上天皇、恒良親王、成良親王らを生んだ。天皇の隠岐配流に随行し、建武新政府のもとで准三宮となり、権勢をほこった。『太平記』には、才色兼備で「殊艶」のみならず「便佞」であるので、後醍醐の数多い寵姫のなかでも一番のお気に入りで行くところにも一緒であったと記されている。

後醍醐天皇の寵愛を受けており、数人の皇子を生んでいる廉子にとって、鎌倉幕府倒幕に尽力し、建武の中興で征夷大將軍・兵部卿に任じられた大塔宮護良親王は、自分の生んだ皇子を皇位につけるためには邪魔な存在だったのではないかと考えられる。

足利尊氏

室町幕府初代將軍（在職一三三八～五八）。初め高氏と称し、後醍醐天皇の諱、尊治の一字を賜って改名。元弘の変で六波羅を攻め落とし、のち天皇に背き、持明院統の光明天皇を立てて北朝を興した。一三三八年に征夷大將軍となり、室町幕府を開いた。

新井氏は、護良親王と尊氏について、次のように述べている。足利尊氏は護良を挑発し、護良は足利を襲撃しようとし、京都のなかでは両者の関係がただならぬものであったことは誰もが知っていたので、大方の研究者が護良親王殺害の事件について、護良にたいする足利の宿意によるもの、とみるのは至極当然でもあるが、護良が殺害されたのは、はたしてこれだけの理由からだろうか。もう少し深い政治的背景があったのではないか。それは、護良を將軍とする鎌倉幕府の復活を足利が恐れたことによると考えられると述べており、護良親王と尊氏はともに鎌倉倒幕に尽力したが、予想以上に複雑な関係であったことを示唆している。

五、護良親王殺害の理由

大塔宮護良親王は、元弘の乱に僧兵を率いて活躍するなど、鎌倉幕府倒幕や後醍醐天皇の新政に尽力し、建武の中興で征夷大将軍・兵部卿に任じられる。しかし、のちに足利尊氏と対立するようになる。

護良親王は、幕府が滅亡したにも関わらず、大和国信貴山（奈良県平郡町）に籠城して臨戦態勢にあった。これに対し、後醍醐天皇は勅使を派遣し、軍勢を解散して再出家し、比叡山に戻ることを勧告したが、護良は、足利尊氏に幕府再興の野望があることを理由にこれを拒否し、逆に尊氏を討伐することを要求したという。倒幕戦争の最終盤に寝返って一番おいしいところを持っていき、幕府滅亡後も事実上京都を支配する尊氏に、護良親王が強く反発していたことは確かだろう。

梶井門跡での教育によって東国の武家を憎む護良親王にとって、尊氏は本来であれば北条一門のように滅ぼすべき存在だったのではないだろうか。それが、倒幕戦争の最後の最後に寝返った尊氏を後醍醐天皇が実子である自分より厚遇していたことはおもしろくなかったのではないだろうか。

後醍醐天皇が実の子であり、幼いころは東宮にと考え、鎌倉幕府倒幕において活躍した護良親王を失脚させた理由は諸書によって異なるが、『太平記』には次のように記されている。

征夷大将軍となつた護良親王は、足利尊氏討伐の名目で兵を集め、その数を増やしていった。集められた兵は、夜な夜な京白河あたりをうろついて辻斬りをしていたという。そのうち、護良親王は、諸国へ令旨を出し、兵を集めるようになる。これを聞いた足利尊氏は、護良親王の継母阿野廉子を通じて後醍醐天皇に対し「大塔宮は、帝位を奪うため諸国の兵を募っている。その証拠は明らか」と告げ、護良親王の令旨を差し出している。激怒した後醍醐天皇は、「大塔宮を流罪に処すべし」として、清涼殿での集まりとして護良親王を呼び寄せ、そうとは知らずに参内した護良親王を馬場殿に押しこめた。

後醍醐天皇からすれば、護良親王の倒幕の際に果たした貢献は確かに絶大だったが、再出家の命令に従わず將軍を名乗ったこと、最大の功勞者である尊氏を公然と敵視し、襲撃を企て、真実かどうかはわからないが、護良親王が集めた兵たちは夜な夜な辻斬りをしているということから確執が生まれたのではないだろうか。中でも、後醍醐天皇にとって、己の分身である、分身でなければならぬ護良親王が帝位を奪おうとしているというのは、建武の新政を進めたい後醍醐にとって、最も許しがたい裏切りと捉えたのではないだろうか。

後醍醐天皇の怒りを買ひ、清涼殿で捕らえられた護良親王は鎌倉に流され、土牢に幽閉された。幽閉されている間、後醍醐天皇に書状を送ったが、後醍醐天皇の怒りを恐れた者のために、書状は後醍醐天皇のもとに届けられることは無かった。

……余りの御悲しみの至りにや、内々御書を遊ばされ、御心寄せの女房して、急ぎ伝奏に付けて奏聞を経べしと仰せ遣はしける。その詞云く、

まづ勅勘の身をもつて、罪なきの由を奏せんと欲するに、……。護良とぞ遊ばされける。この書もし叡聞に達したらば、宥免の御沙汰もあるべかりしを、伝奏諸の憤りを恐れて、つひに奏せざりしかば、上天聴を隔て、中心の訴へ解けざりけるこそ情けなけれ。（『太平記』卷十二 兵部卿官御消息の事）

もし、この書状が後醍醐天皇のもとに届いていれば、護良親王は許され、都へ戻れたのであろうか。どうなっていたのかは想像するしかないが、個人の考えとしては、たとえ、後醍醐天皇のもとへ書状が届いていたとしても、許されなかったのではないかと考える。足利尊氏と阿野廉子の進言を信じ、噂が真実か調べることも、護良親王の話の聴くこともなく、流罪に処したのだから、仮に、護良親王からの訴えがしたためられた書状が届いたとしても、許さなかったのではないだろうか。また、

分身でなければならぬ護良親王が帝位を狙っているというのは、後醍醐天皇にとって許しがたいことであるので、書状を読むことすらもしなかつた可能性も考えられる。

結局、どうあつても護良親王が後醍醐天皇から許されることはなかつたのだろうと考えられる。

諸説あるが、その後、九ヵ月近く幽閉された護良親王は、その後、足利直義の密命を受けた瀨辺伊賀守義博に殺害されたという。長い幽閉生活は護良親王の体力や筋力を著しく奪っていたが、この時、護良親王が頑強に抵抗し、瀨辺の刀を歯で啣えて折つたという逸話は有名である。

……宮は土の楼に半年ばかり居曲ませ給ひて、御足も快く立たざりけるにや、御心は矢武に思し召しけれども、打臥に倒れさせ給ひけるを、起しも立て進らせず、御胸の上に乗り懸かり、腰の刀を抜いて、御頸をかかんとしけるを、宮御頸縮めさせ給ひて、刀の鋒をしかとくはへさせ給ひしかば、瀨辺も強なる物にてはあり、刀を奪はれ進らせじと引きもぎける程に、刀のさき一寸余り折れて失せにける。瀨辺その刀をば打ち捨てて、脇指の刀にて御胸元を二刀まで指したりければ、宮些し弱らせ給ひけるところを、御ぐしをつかんで、御頸をかき落とす。(前掲『太平記』卷十三より)

護良親王を殺害した瀨辺伊賀守義博は、護良親王の首があまりに恐ろしい形相で睨みつけていたので恐れおののき、首をやぶの中に捨て入れたとも言われている。護良親王の首は、近くにあつた理智光寺の住職がこれを埋葬したともいわれている。同寺は明治の初めに廃寺となり、寺の跡地にある護良親王の墓は現在、宮内庁が管理している。

幽閉されるまでの護良親王をめぐる事態の流れから、護良親王の烈しい尊氏への憎しみが、かえって自分を取り巻く政治関係を見えなくさせたために行動の判断をあやませたと見える。不撓不屈と謀略、多分に柔軟性を持った目的主義を身上とする後醍醐天皇、一つ判断を間違えれば一族を滅ぼしかねない北条専制のもとで、バランスと手練手管で生き



護良親王が幽閉されていたといわれる土牢(鎌倉宮)

てきた足利尊氏、他の女性を押しつけて「便佞」(ことば巧みで人の気に入るようになり立ち回るのがうまいこと)ゆえに後醍醐天皇の寵を独占し、宮中政治への容喙をほしいままにした阿野廉子。こうした人々をまえにして、もっぱら戦闘にあけくれてきた青年貴公子護良親王はあまりにも純朴であつたと新井氏は述べる。

確かに、幼くして梶井門跡の大塔に入り、武勇に明け暮れてきた護良親王は後醍醐天皇、足利尊氏、阿野廉子の三人と比べれば、政治に疎く、素朴であつたのであろう。鎌倉幕府倒幕において重要な役割を果たしたという自負もあつただろうと考えられる。それゆえに後醍醐天皇の考えに合わない政治的志向に進んでいき、後醍醐天皇の機嫌をそこねてしまったのだろう。また、尊氏や阿野廉子といった後醍醐天皇の周囲の人物たちとも対立するようになり、二人の策略に判断をあやまつてしまったのだろう。

鎌倉幕府倒幕の第一の功労者は護良親王であると新井氏は述べている。護良親王は、政治的に担がれるたんなる飾りではなく、自ら意志的に、政治・軍事活動を推し進める存在であつた。自分の頭で戦略を練り、自分の意思で作戦を実行する存在であつたため、倒幕戦争に勝利したのである。護良親王が戦争を主導しなければ、天皇家の戦いにはならないし、これに勝利することもできなかったであろう。だが、護良親王が主体的・主導的に動けば動くほどに天皇の名代としては逸脱していくことになるのである。あくまで、主体的・主導的であるのは後醍醐天皇であつ

て、名代の護良親王であってはならない。だが、護良親王にはそのようなことを考えるゆとりはなく、またそのような政治性も身に付けていなかったのだろう。己のすべてを使って勝ち続けることこそが、鎌倉幕府倒幕における自分の役割であると考えていたのではないだろうか。この、後醍醐天皇と護良親王との間に生じた矛盾は、のちに、護良親王を軍務から外し、戦争指揮権を回収し、法体に戻す、といった動きとなってあらわれる。また、護良親王の代わりかのように、足利尊氏が活躍していく。これにたいして、十分な政治性を身に付けていなかった護良親王は、真つ向から押し返そうとしたのである。

後醍醐天皇と護良親王との間に生じた確執は、取り払われることなく大きくなっていく。そこに足利尊氏や阿野廉子らの策略も加わり、結局、後醍醐天皇と護良親王の間に生じた確執、対立は出口のないまま護良親王の死をもって終息する。

護良親王の遺児

護良親王には、北畠親房の妹との間にできた子とされる遺児がいた。〔太平記〕巻三四)この子は、父・護良親王が大塔宮であったことにちなんで、「大塔若宮」と称されたが、のちに興良親王と称し、また、常陸親王、赤松宮とも呼ばれた。彼は、何歳の頃であったかは不明だが、武家にたいして烈しい反抗活動を畿内で展開し、十四世紀中ころまで全国を東に西に戦っていたが、その後、不思議なことに、彼は突如南朝拠点の賀名生を襲う。大塔若宮のこの行動は、父・護良親王の怨念であったらうかと新井氏は述べている。この事件のあと、興良親王は消息を絶ち、その後の足取りは杳としてわからず、歴史の闇に消えるのである。^(注5)

伝説となった護良親王

あまりにも悲劇的であり、残酷だった護良親王の死は庶民の間で悲劇の皇子として伝説化された。護良親王が幽閉された際、護良親王の愛妾であった南御方だけが、幽閉された護良親王の側にいることを許されていたという。南御方は、殺害された護良親王の首を携えて戦乱の東海道を越えて都へ向かう途中、甲斐国秋山の里(現山梨県南都留郡秋山村)

に来たところで護良親王の子を産むが、難産がたたり死んでしまうといふ。その後の語り伝えにはいろいろの内容があり、

- 一、雛鶴姫は産後すぐ他界し、王子も間もなくはかない命を絶った。
- 二、王子はしばらく生存したが幼児のうちに他界し、雛鶴姫もそのあと間もなく他界した。
- 三、姫は産後間もなく他界したが、王子は十二〜十三歳まで生存して他界した。

など、様々な言い伝えがある。このとき、産み落とした皇子は興良親王とは別の皇子である可能性が高いだろう。これが「雛鶴伝説」であり、この伝説に関連して、相模国北部から甲斐国南都留地方にかけて、護良親王や南御方(雛鶴姫)にちなむ地名や神社などが分布している。^(注6) 雛鶴姫が越えようとした山梨県上野原市と同県の都留市にある峠は「雛鶴峠」と呼ばれ、山梨県都留市には雛鶴姫が祀られている雛鶴神社があり、同じく山梨県都留市にある石船神社には護良親王とされる首級が祀られている。代表的なのはこの二つの神社であるが、他にも各地に護良親王と雛鶴姫にちなむ神社がある。

また、護良親王が幽閉されていた東光寺跡には、護良親王に想いをこめた明治天皇の勅命により、護良親王を祭神とする鎌倉宮があり、護良親王が幽閉されていたという土牢も残っている。鎌倉宮の近くには宮内庁が管理している護良親王の墓もある。

護良親王の死は史実はさておき、人々の感情に深く刺さるものであり、南御方の護良親王への献身的な愛や子を産み死ぬという悲しい最期が同情を誘うものだったのであろう。高校の日本史の授業等では触れられぬ存在でありながらも、近年、護良親王に関する書籍が出版されるようになり、「雛鶴伝説」をもとにした梅谷百氏の『キミノ名ヲ』(アスキー・メディアワークス 二〇一〇年刊)などの小説や漫画が出版され、若者の間で話題を呼んだ。

帝の皇子であり、武勇に優れ、僧兵を率いて活躍し、鎌倉幕府倒幕において多大なる功績を残しながらも、実の父である後醍醐天皇との間に

確執が生じてしまい、残酷な最期を迎えた悲劇の皇子と、そんな護良親王の寵姫であり、幽閉された護良親王を支え、身重でありながら、殺害された護良親王の首を抱えて都へ向かい、難産のすえに亡くなった雛鶴姫の伝説は現代の人々の同情を誘い、特に若者に注目され、今なお、様々な形で語り継がれている。

最近の二年の間に護良親王を題材とする書籍が発売されたことから、今後も護良親王に関する書籍は増えていくように感じる。また、護良親王に限らず、少なかった南北朝時代についての書籍も増えていくだろう。

六、まとめ

幼くして梶井門跡に入り、二十歳という若さで比叡山延暦寺の天台座主となった護良親王は、武勇に秀で、元弘の乱にて僧兵を率いて活躍、鎌倉幕府倒幕や後醍醐天皇の新政に尽力し、建武の中興で征夷大將軍・兵部卿に任ぜられるなど、後醍醐天皇の分身として、多大なる功績を残しているかと思いきや、その武勇と利発さから、自覚のないまま、後醍醐天皇の分身という枠を飛び越える行動をしてしまい、後醍醐天皇との間に確執が生じてしまった。また、足利尊氏や阿野廉子らといった一癖も二癖もある二人との政治的思惑にも負けてしまい、捕らえられることとなり、奇しくも、自身が倒した鎌倉の地に幽閉され、そこで首を落とさず最期を迎える。

また、護良親王は、幽閉された鎌倉の地で「武家よりも君の恨めしく渡らせ給ふ」とこぼしたという。幼いころから梶井門跡に入り、父・後醍醐天皇のため武勇を磨き、鎌倉幕府倒幕や後醍醐天皇の新政に尽力したにもかかわらず、最後には尊氏と阿野廉子らに政治的に負け、結果的には、後醍醐天皇の意思に沿った形で刺客として使われ、最後には見放されてしまったのだ。このことから、護良親王が、「武家よりも君の恨

めしく渡らせ給ふ」、つまり、「帝位を狙っている」などと告げ口をした尊氏よりも、その言葉を信じ、護良親王の言葉に耳を傾けることなく、流罪に処した後醍醐天皇への恨みのほうがはるかに強かったたのである。幼いころより父である後醍醐天皇のために生きていたようにも思える人生を送っていた護良親王にとって、息子である自身の訴えよりも敵方であったはずの尊氏の言葉を父・後醍醐天皇が信じたことは、ひどい裏切りのように感じ、見捨てられたような気持ちになったのではないだろうか。父である後醍醐天皇のために尽力し、鎌倉幕府倒幕を果たしながらも、その後醍醐天皇に信じてもらえなかったというのは、護良親王の心に深い傷をつけたのではないだろうか。それを想像してみると、「武家よりも君の恨めしく渡らせ給ふ」とこぼし、後醍醐天皇を深く恨んでいたのではないかというのも頷ける。

だが、後醍醐天皇にとって護良親王は、己の分身でなければならなかったたのである。あくまで、後醍醐天皇の分身として動き、後醍醐天皇が親政を進めるうえで有力な存在であらなければならず、決して、その分身という枠を飛び越え、主体的・主導的に動いてはならなかったたのである^(注1)。幼いころ、東宮にと考えるほど認めていた護良親王の優れた武力と大胆な利発さは、いつしか後醍醐天皇にとっての足かせとなってしまったのである。そのため、護良親王との間に徐々に確執が生じていき、鎌倉幕府倒幕後の行動に表れるようになっていったのだ。

南北朝という日本史の中でも最も混沌とした時代を駆け抜けた護良親王。彼の死後、尊氏は室町幕府を興し、栄華を極めていく。護良親王の行動の一つひとつは室町幕府にとって利益を与える行動となっていたたであろう。護良親王の死は、護良親王独自の政治的な志向から後醍醐天皇とのそりが合わなくなり、後醍醐天皇の分身という枠を飛び越えてしまったことや、武勇には優れていたものの、十分な政治性を身に付けていなかったために、尊氏や阿野廉子といった後醍醐天皇の周囲の人間の策略に気づくことができず、負けてしまったことが原因と言えるのではないだろうか。

- 1 森茂暁 『後醍醐天皇 南北朝動乱を彩った霸王』 中央公論新社
二〇〇〇年二月刊
- 2 森茂暁 『皇子たちの南北朝 後醍醐天皇の分身』 中央公論新社
二〇〇七年十月刊
- 3 『本朝皇胤紹運録』、応永三十三年（一四二六年）成立。『群書類従』
系譜部卷六十による。
- 4 『太平記』 卷十二 兵部卿宮御消息の事
- 5 亀田俊和 『シリーズ【実像に迫る】〇〇七 征夷大將軍・護良親王』
戎光祥出版 二〇一七年四月刊
- 6 注5に同じ。
- 7 新井孝重 『護良親王——武家よりも君の恨めしく渡らせ給ふ——』
ミネルヴァ書房 平成二九年九月刊